

友なる犬をどう詠うのか

椎名 恵理

人間と犬はどんな関係か。人間と付き合いの長い犬は、狩猟犬や軍犬など人間の武器のような役割として生きた時代がある。また江戸時代頃まで、犬肉食が行われていたことも知られている。時代によって人間と犬の関わり方は変化し、優れた知覚、高い身体能力ゆえに現在では警察犬、探知犬、救助犬、介助犬などとしても、人間の生活を助け、重要な役割を担っている。

その一方で、人間の生活をより良くするという目的のために各種の研究機関では、動物実験の犠牲になり、また人間に捨てられた犬たちが保健所で処分されている。

犬は友か、家畜か。武器か、相棒か。古くから関わりの深い犬を、人はどう詠うのか。

【犬飼へば犬の死にあふ―家族としての犬】

人間と犬との関係は、近年一層近くなっている。毎日のようにテレビでは動物特集の番組があり、InstagramやYouTubeなどでも、多くの閲覧数と「いいね」を稼ぐ一大コンテンツになっている。犬を家族として扱う人が増えていることが理由だろう。犬の地位向上と獣医学の進歩により、

人間のように高度で高額の医療を受けられるようになったことから、この数十年で犬の平均寿命は飛躍的に伸びている。それでも、犬の寿命は人間よりずっと短い。犬が人間のように七〇〜八十年生きることは不可能である。生まれたばかりの子犬だとしても、飼い始めたその瞬間から、その死に立ち会う覚悟が必要になる。

まだ犬は生きてゐるのにかれの死を悲しみ
つくし歌は生れ来る 河野愛子『光の中に』

飼い犬が日向を選び横になる天に召される
準備のように 工藤玲音『水中で口笛』

雪柳の花のこまごま散りそめぬ帰ることな
き犬の名を呼ぶ 大西民子『雪の地図』

犬飼へば犬の死にあひ猫飼へば猫の死にあ
ひ 米を研ぐなり 小田部雅子『水と光』

一首目は、愛犬家ならではの歌だ。自分のそばで遊び食べ寝ている犬のその先に、いつか必ず来る悲しい別れを想像してしまふ。悲しむのではなく「悲しみつくし」という表現から愛犬への強い愛情が伝わる。

二首目からは、犬の年齢や健康状態はわからない。ただ日

向で犬が寝ているだけかもしれないが、寿命の短い犬を思うと、穏やかに横になる姿から死を想起してしまう気持ちも理解できる。

雪柳の花言葉には「愛嬌」や「静かな思い」などがあり、小さな花を枝いっぱいにつけたしなやかで清楚な印象がある。伸びた枝や散る小さな花と愛犬は、たくさん遊んでいたのかもしれない。三首目の下の句から、犬がもう帰らないということがわかり一層散る雪柳が寂しく映る。もういない犬の名を呼ぶのは、犬が大切な存在だったことを示している。

小田部雅子の歌には、犬や猫の死に立ち会い、その中で生きていく自分が力強く歌われている。『水と光』には、次の歌もある。

俺たちを捨てていくんだね先生は さうだ
よ 君らを捨てて生きるの 小田部雅子『水と光』

教員である作者は毎年、新入生を迎え、同時期に卒業生との別れを繰り返す。この歌と犬猫の死の歌が、ゆるく共鳴する。いつか必ず「死」がくる。その別れに絶望すると知っていても、それでも何度でも人間は、犬という愛くるしい家族を迎え入れたのである。そして予定通りに絶望しても米を研ぎ、自分は生きてゆくのだ。

【訓練中の盲導犬くるー仕事をする犬】

盲導犬、介助犬など人間に寄り添い助ける犬が増え、その活躍の場は広がっている。病院に勤務するファシリテーターという職業犬がいる。入院している子どもたちの検査や

手術室への同行、採血や投薬の際に寄り添うなどのサポートをすることで、子どもたちの不安を和らげることができるのだ。人間ではなく、彼らにしかできない立派な仕事である。仕事を持つ犬はその賢さ、優しさ、忍耐強さゆえに、選ばれる厳しく訓練されている。

すぐに弾むころとからだ叱られて訓練中
の盲導犬くるー 小島ゆかり『雪麻呂』

盲導犬も人間を支えている。訓練中ということは一歳前後だろう。犬の一歳といえば、まだ遊び盛りだ。外に出れば、道端の植物や虫、自動車の音、排気の匂い、すれ違うあらゆるものに興味を示し、走り回りたくなる年頃である。しかし訓練中の盲導犬は、その弾む「ころ」と「からだ」をすぐに叱られてしまう。

訓練してユーザーから信頼され、責務を全うすることこそが、あるいは彼らの幸福かもしれないと思いつつも、人間に尽くすために選ばれた犬に対する作者の心の揺れを感じる一首である。

【友なる犬を置き去りにせりー震災と犬】

小さな生き物を慈しむ歌が多い小島ゆかりの歌の中で、最も印象的だったのが二〇一四年刊行の『泥と青葉』である。東日本大震災で、原発から半径二十キロ圏内の警戒区域で置き去りにされてしまった動物たちを詠んだ歌は、今でも多くの人の心に刻まれているはずだ。

家族同然なれど家族にあらざれば牛、豚、

犬ら放置されたり 小島ゆかり『泥と青葉』

南極に放射線下ににんげんは友なる犬を置

き去りにせり

ああ犬は賢くあらず放射線防護服着る人に

尾をふる

置き去りにすることを飼い主が望んだわけではないし、避難所で動物を受け入れることが難しい事情があることも理解はできる。それでも、避難用バスと一緒に乗ることができなかった飼い主の思いはどんなものか。家族同然でも家族ではないという線を引かれる苦しさと同時に、人間から犬への深謝のように感じる。

作者は、十分に、犬たちの賢さを知っている。それでも三首目のように詠まずにいられない、いたたまれない場面があったのだ。動物たちを置き去りにした人間は、自らの身を守るために防護服を着ている。それでも無防備で無垢な犬たちは、人間に尻尾を振ってその再会を喜んでしまうのだ。

【春は水にきて目に見える―犬の特殊な能力】

この夜半も地震ふるふより数秒前家犬は吠

ゆ 猟犬種にて

宮柎二『忘瓦亭の歌』

黒犬の頭撫でつつをりふしのあらはしがた

き孤独も遣りぬ

宮柎二『多く夜の歌』

はらわたを絞って犬が糞するを見つつ立ち

をり心弱く吾れ

宮柎二『晩夏』

嗅覚、聴覚に関していうと、人間とは全く別の知覚世界を、

犬は生きているのだと思う。その能力は、そばで生活する我々にいつもほんの一瞬先の世界を知らせてくれる。一首目は、地震の揺れ始める数秒前にそれを感知して吠え始める犬の歌だ。猟犬種は、本能的にもその知覚が優れており敏感なのだろう。宮柎二の歌に出てくる犬には、独特の魅力がある。犬の頭を撫でるときにあらわれた孤独を分け遣れる犬の歌、はらわたを絞って糞をする姿に見入る歌も印象深い。心が弱っていても、そばに力強く生き、排泄している犬がいる。糞は、直前までその犬の一部であった生の欠片であり、不思議な生命力が自身に移る思いがする。日常の様々な場面で、犬の鳴き声や仕草が詠まれ、精神的にも犬が身近であったことがわかる。

犬類に金木犀の花の香はいかにかひびくこ

のゆふぐれに

小池光『草の庭』

犬連れて動物園へ来しときに危険思想は拒

まれにけり

小池光『日々の思い出』

立春はまださむけれど春は水にきていてテ

オの目にみえるらし

佐佐木幸綱『春のテオドル』

人間の嗅覚にも深く香りくる金木犀の香は、嗅覚の優れた犬類にはどう届くのだろうか。そんな思いを巡らせる穏やかな夕暮れである。二首目の危険思想がどんなものかはわからない。それでも犬と動物園にいる動物たちに囲まれた時に、その思想を和らげる不思議な水流のようなものがあつたのではないだろうかと思像させられる歌だ。

愛犬家として知られる佐佐木幸綱の歌集『春のテオドル』は、愛犬テオドル（通称テオ）への溢れ出す愛情が豊富に詠み込まれていて、非常に微笑ましい。

人間は、「立春」を見るのができない。わずかに長くなる日、微かな気温の変化、控えめに咲き始める花を少しずつ足し算して、春の近付きを感じるしかない。しかしテオは、透明で静かな水の中に、春を見つけることができる。単に嗅覚、聴覚の鋭さによるものだけではない。犬は、優しいから春が見えるのではないか。少々大げさな解釈かもしれないが、私はこの歌を読んでから、ずっとそう考えている。

【柴犬リリイ吠ゆー犬種を詠う】

帰省せる我に柴犬リリイ吠ゆうけ幼犬なれば吠えられてやる
高野公彦『地中銀河』

巨きなる鞆丸は垂れハスキー犬楚楚たる少女にしたがひ往くも
島田修三『離騷放吟集』
人ごみをうまく縫えずに二度三度ダックスフントを蹴りそうになる

工藤玲音『水中で口笛』

一般社団法人ジャパンケネルクラブによれば、世界には非公認犬種を含めて約七〜八百の犬種があるという。犬種によって能力も性格も違う。

柴犬といえば、飼い主に忠実で勇敢、見知らぬ人には警戒心が強いなどがイメージされる。帰省した作者に対して、幼犬のリリイは騒がしく吠えたのだろうか。社会や家族の一員と

して健やかに生活できるよう、幼い頃からある程度の躾をしなければならぬと分かっている。愛らしい幼犬の鳴き声と姿を前に、素直に「吠えられてやる」という作者の甘やかし方は、軽快で心地よい。

麗しい少女が連れているハスキー犬は、狼のようなワイルドで端正な顔立ちをして、独特な模様がスタイリッシュでかっこいい。二十キロを超える身体と大きな鞆丸が浮び、男性的で逞しい姿と、隣に並ぶ少女とのミスマッチが面白い。

胴長短足で知られるダックスフントは、よちよちと歩く姿が特徴的である。日本では飼育数が多く、人気ランキングで常に上位に入る犬種である。地面に近いところを歩くダックスフントを、作者は何度も蹴りそうになるというシニカルな歌だ。確かにその姿から、歩く人の足が腹に引っかかり、蹴り上げてしまいそうになるかもしれない。具体的な犬種を入れることで、より印象的な歌になっている。

犬はいつもはつらつとしてよろこびにからだふるはず
奥村晃作『鴉色の足』

人間と犬の関係は複雑であり、時によつては大変に残酷で、そして理不尽なものでもある。それでも五千年とも一万年とも言われる昔に、犬と共に生きることを人は選んだ。これまでもがそうだったように、犬との関わり方は変化するはずであり、歌を通してその関係性を辿ることができるだろう。犬はいつもはつらつとして、よろこびに対して素直にからだを振るわせる凄いきみものである。だから人はそのそばにいて、彼らを詠み続ける。